

放生会

ほうじょうえ



放生津八幡宮

射水市立放生津小学校総合授業資料
2020年（令和2年）11月9日

桧物和広
Kazuhiro Himono

放生会 (ほうじょうえ)

1. まえがき

「放生会」とは、捕獲した魚や鳥獣を野に放し、殺生を戒める宗教儀式であり仏語であります。仏教の戒律である「殺生戒」を元とし、日本では神仏習合によって神道にも取り入れられた儀式です。

写真01 鶴を放す図



源頼朝(1180年／治承4年挙兵)が行なった鶴岡八幡宮の放生会。由比ガ浜で千羽の鶴を放ったと言われる。八幡神は源氏の氏神。

歴史としては、「放生会」は古代インドに起源をもつ行事で中国や日本にも伝えられた。

『金光明最勝王經』長者子流水品には、釈迦仏の前世であった流水(るすい)長者が、大きな池で水が涸渇して死にかけた無数の魚たちを助けて説法をして放生したところ、魚たちは三十三天に転生して流水長者に感謝報恩したという本生譚(ほんしょうたん:仏教でいう前世の物語)が説かれている。また『梵網經』(ぼんもうきょう:大乘仏教の経典)にもその趣意や因縁が説かれている。

2. 中国における放生会

仏教儀式としての「放生会」は、中国天台宗の開祖智顛(ちぎ)が、この流水長者の本生譚(ほうしょうたん:ヒトや動物として生を受けていた前世の物語)によって、漁民が雑魚を捨てている様子を見て憐れみ、自身の持ち物を売っては魚を買い取って放生池に放したことに始まるとされる。また『列子』(れっし)には「正旦に生を放ちて、恩あるを示す」とあることから、寺院で行なわれる放生会の基となっている。

列子(れっし)は、中国戦国時代の鄭の圃田(現在の河南省鄭州市中牟県)の哲学者。

3. 日本における放生会

日本においては天武天皇5年(677年)8月17日に諸国へ詔を下し放生を行わしめたのが初見であるが、殺生を戒める風はそれ以前にも見られたようで、敏達天皇(びだつてんのう)538年?の7年(578年)に六斎日に殺生禁断を畿内に令したり、推古天皇19年(611年)5月5日に聖徳太子が天皇の遊獵を諫(いさめる)たとの伝えもある。持統3年(689年)には近畿地方を中心とする数か所に殺生禁断の地が設けられ、定期的に放生会が開かれるようになった。

聖武天皇の時代には放生により病を免れ寿命を延ばすとの意義が明確にされた。

現代では収穫祭・感謝祭の意味も含めて春または秋に全国の寺院や、宇佐神宮(大分県宇佐市)を初めとする全国の八幡宮(八幡神社)で催される。特に京都府の石清水八幡宮や福岡県の筥崎宮のもの(筥崎宮では「ほうじょうや」と呼ぶ)は、それぞれ三勅祭、博多三大祭の一つに数えられ多くの観光客を集める祭儀として

も知られている。

また、これらの行事にはウナギの取扱業者やフグの調理師などが参加する姿が見られる。国内の各神社は、それぞれの歴史を持っています。

(1)宇佐神宮(大分県宇佐市)

日本における放生会の起源であるとされるが、その内容はいくつかの点で独特である。

正式には陰暦8月15日であるが、現在は体育の日を最終日とする3日間(土曜日から月曜日)に催される。「仲秋祭」という名に改称されているものの、マスコミや観光客に限らず氏子など関係者も「放生会」と呼んでいる。

「放生会」で放されるのは蜷(巻貝)である(通常は演出効果の意味もあり魚や鳥が使われる)。

北九州にある幾つもの神社が神幸に加わり、古宮八幡宮から神体となる銅鏡が奉納されるなど、北部九州の神社が一体となって行なわれる。

(2)石清水八幡宮(京都府八幡市)

例年9月15日に石清水祭の中の儀式として執り行われる。

宇佐神宮より八幡神を勧請したのとほぼ同時期に放生会も伝わり、天曆2年には勅祭として執り行われるようになるなど、京都の年中行事の中でも重要な祭の1つであった。しかし明治期の神仏分離によって禁止され、石清水祭として残るものの、伝統の多くが失われていった。

平成16年(2004年)、「石清水八幡宮放生大会」として有志等の手により137年ぶりに古来からの神仏習合としての儀式が復活し、かつての「放生会」が推測できるような形での祭が行なわれている。

(3)筥崎宮(はこぎきぐう:福岡市東区箱崎)

読みは「ホウジョウヤ」。例年9月12日から18日に博多三大祭の1つとして盛大に行なわれる。「ナシもカキも放生会」と言われるほど、秋の行事として親しまれている祭である。

(4)鶴岡八幡宮(神奈川県鎌倉市)

『吾妻鏡』に文治3年(1187年)8月15日に放生会と流鏑馬(やぶさめ)が行なわれた記録がある。現在では毎年9月の例大祭で、境内の林に鈴虫を放つ「鈴虫放生祭」が行なわれる[9]。

(5)その他:放ち亀・放ち鳥等

江戸百景の『深川万年橋』の「放生会」には放ち亀や放ち鳥などの行事が行われる。

「放生会」で亀や魚を逃がすために寺院等に設けられた池を放生池という。

かつては寺社近隣の河川で行われることもあり、亀屋から客が買って川に放した亀を、亀屋が再び捕獲してまた新たな客に売るといった商売が行われていた。

現在の日本では行われていないが、台湾、タイ、インドでは今でも放生用に亀や魚、蛙、貝、鳥などを売る店、業者が存在する。タイ語では人助けを含めて徳を富む行為として「タンブン」と呼ばれる。タイでは放す生き物によりご利益が異なると信じられている。鰻は金運、亀は長寿、小鳥は幸運・幸福などである。

江戸時代の「放生会」は民衆の娯楽としての意味合いが強く、1807年(文化4年)には富岡八幡宮(東京都江東区富岡)の「放生会例大祭」に集まった参拝客の重みで永代橋が崩落するという事故も記録されている。

写真02 放生会(魚や鳥を放す儀式(行事):想像図



また、小林一茶の詠んだ句にも、「放し亀 蚤(ノミ)も序(ついで)に とばす也」は亀の放生を詠んだ句である。

(6)放生津八幡宮

社伝によると、746年(天平18年)七月、大友家持が越中国司として赴任し、751年(天平勝宝3年)小納言に昇進、都へ帰るまでの五年間を高岡市伏木の国庁に在任。奈呉浦の勝景を愛し、豊前国宇佐八幡宮(大分県宇佐市)の分霊を勧請して「奈呉八幡宮」とした。

当宮文書には、1328年(嘉暦3年)に、「奈呉の地名を放生津に改めた」という記事があります。当宮の放生会が放生津の地名の由来になったと考えられています。

当時から大祭には放生会が営まれていたことから、1328年(嘉暦三年)地名が放生津と改められた。後、北条時政が再興したと伝えられ、1312年～1317年(正和年間)、放生津城主「名越時有」が社殿を造営、社司(社司:宮司)別当を付し社領八幡田を寄進。

永禄年間、上杉謙信の兵火にかかり焼失したが、放生津城主神保長職が再興した。

藩主前田家の崇敬(すいけい)篤かったが、1845年(弘化2年)2月、放生津の大火にかかり社殿、宝物等ごとく焼失した。

その後、氏子の「大西弥兵衛」等が藩命により社殿を再建。現在の社殿は1863年(文久3年)七月竣工したものです。

1872年(明治5年)郷社に列し、同三十二年県社に昇格し、1911年(明治44年)現在の放生津八幡宮に改称した。当社の神紋は桐と菊であり、拝殿提灯や神馬像に桐紋と菊紋の合せ紋が付けられている。境内の右手に、境内社が二つあり、火ノ宮社(軻遇突智命)と来名戸社(八衢比古命 八衢比賣命)がある。

写真03 放生津八幡宮「放生会」

築山行事と放生会の神事が毎年「秋の例大祭」に行われ、10月1日の曳山神事に続き例大祭が行われる10月2日には、境内にて古代信仰の形態である築山神事が行なわれる。

放生津の曳山はこの築山神事を移動できるように発展させたものと考えられており、築山の起源はよくわかっていないが、江戸時代初期より行なわれていたことが1721年(享保6年)の「東八幡宮記録」や「築山古老伝記」に記録されている。

また2014年(平成26年)9月には社務所で江戸時代中期の1764年(明和元年)の築山に使用された約2mの表具を施した祝詞の巻物が発見された。88行に渡り祝詞が記されている。



写真04 築山神事

尚、この行事は1982年(昭和57年)1月18日に富山県の無形民俗文化財に指定されている。また2006年(平成18年)には、「とやまの文化財百選(とやまの祭り百選部門)」にも選定されている。

9月30日夕方境内の高い松の木に神霊を海よりお迎えする魂迎式(御魂祭)が行われる。10月2日の例大祭には境内の高い松の木の西面に、幅7.2m、奥行3.6m、高さ2.7m上下2段の雛壇様式の臨時的築山(祭壇)を設け、下段の四隅には、それぞれ面をつけた仏門守護の四天王、持国天(じこくてん)・増長天(ぞうちょうてん)・広目天(こうもくてん)・多聞天(たもんてん)を配し、上段中央には唐破風屋根の神殿の上に鬼女(狂女)の面に白髪を振り乱し、金欄の内掛けをはおり、御幣を取付けた長い竹竿を持った主神である姥神(オンババともいわれる)を祀る。



また毎年「飾人形」といわれる越中にゆかりのある人物人形も飾られ、神霊を松の木より築山に迎え入れ神事が行われる。

また社殿ではこの地区の地名の由来となった「放生会」が行われる。尚、築山行事が終わると姥神が暴れるとされる言い伝えにより、築山は大急ぎで解体される。

この「放生会」は2007年(平成19年)に、「とやまの文化財百選(とやまの年中行事百選部門)」に選定されている。

この築山行事は能登にある石動山(せきどうざん又はいするぎやま)の伊須流岐比古(いするぎひこ)神社でも行なわれていたが明治期に廃絶、富山県内でも、ここ放生津八幡宮と、高岡市の二上射水神社で行われているだけであり、全国的にも珍しい行事である。

尚、3ヶ所の主神の見た目から、放生津の「足なし」、二上山の「手なし」、石動山の「口なし」と云われてきた。

写真05 内川に魚を放す神事



現在は、法土寺町曳山格納庫(2019年9月新規完成)前で、10月2日に行われている。

参考

1. 「コトバンク」
2. フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
3. 放生津八幡宮HP